光る病棟の掲示物

病棟を見学している際、ふと目に留まったのが栄養科が発行している「栄養科だより（**写真❸**）」と、その下のポケットに入った「レシピカード（**写真❶・❷**）」です。

スーパーの食品売り場に置いてあるような薄い紙ではなく、しっかりとした厚紙に印刷され、ファイリングできるように穴も開けてあります。

見舞客が足を止めて、思わず手に取ってみたくなるような写真のきれいさ、食材に含まれる栄養素の紹介、そして、盛り付けまで入れて、簡単にまとめられた手順など、いくつも工夫をされていました。

さらに栄養科だよりの裏面には入院食で提供された野菜の生産者の声を写真付きで紹介しています。

近年、食の安全は多くのメディアで取り上げられています。そして、誰しもが普段、口にする物について気にしています。ましてや入院中の患者、家族であればなおさらのことではないでしょうか。

同じ野菜でも何の品種なのか、どのような点に工夫を凝らしたのか、生産者の思いが詰まったレポートを見ると「栄養価が高いのではないか」「食材にまで気を配った入院生活を提供してくれている」といった思いが自然と湧き上がってくるはずです。

入院時食事療養費の患者の自己負担が改定によりアップする中で、より食事に対する期待度、満足度は求められるようになります。入院食だけではなく、広報による取り組みも患者満足度を上げる小さな一つの方法になるのだと感じました。

むすびに

広報活動推進プロジェクトチームの統括である田中公志サービスセンター長は、「すでにこの地域で当院の知名度はあります。だからこそ、ただ当院を知ってもらうだけの広報活動では意味を成しません。“知っている病院”から、“親しみある病院”にしていただける活動でなければならないと思っていますし、患者さん、利用者さん、地域の方々にとって有益となるような情報を提供することが大切と思っています。当院の理念の一つに『‘四者満足’希望と満足を実感できる法人でありつづけます』とあります。この四者とは、患者さん（利用者さん）・地域・職員・法人のことを言うのですが、患者さん、地域の方々にとって少しでも役立てる広報でありたいと願っています」と話します。

病院にとって広報活動は、「縁の下の力持ち的な存在」だと表現する田中サービスセンター長。決して日の当たる場所での活動だけではないですが、病院のイメージ作りの一端を担う重要な役割を持っています。加えて今後、人口減少社会となる中で、ますます広報は疎かにしてはならない取り組みの一つになるのだと感じました。

雑書記

阿知須共立病院では、定年退職した看護師がボランティア団体を作っています。週に1回、療養病棟の患者と一緒に花を生ける取り組みを行っているそうです。生けられた花々は病棟のいたる所に飾られ、可憐な空間を提供しています。
元看護師であれば一般のボランティアの方とは違い、安心して患者を任せられますし、また、OB看護師も会話に花が咲き、イキイキとしているそうです。

（原田　有理）